

スノリ  
セレス

オニ方面軍司令部略証

年月日	概要
昭 七 七 七	オニ方面軍司令は蕪州周辺情勢の變に庇ぜんが為昭和十七年七月二十日青々哈爾に於て編成(方面軍司令官陸軍中将阿南建武)せらる然る外 秋当方面軍司令部を南方に進駐せしめらるるに当り
六 一 〇 五	軍令陸甲九十七号を以て編成改正を命せられ 編成完結後北方面の要域を確保すべき大命を授けし勇躍青々哈爾出發せり
至 自 六 三 三 一	の間セレベス、ニューギニア方面の戦闘 大命に依りオニ方面軍戦序列を解き其の兼指揮下部隊を夫々オニ方面及オニ軍の戦序列に入らしめらる
〃 〃 〃 〃	オニ方面軍司令部復帰完結 オニ軍を南方戦序列(直轄)に入らしめらる

0489

オニ方面 軍兵站路部 輝オ一六三五〇 部隊略正

正代部隊長 陸軍少将 田坂 尊一

年月日	概	要
昭和五十六年五月六日	北都セレブス島トモホン駐屯オニ方面軍司令部に於て編成完結 編成完結後着手事項左の如し	ム少佐参謀を長とする将校以下一〇名ハルマヘラ島ワミン地区に駐 屯し揚陸、揚塔補給業務の処理に任ず
〃 五十八年五月九日	オニ方面軍司令部の中部セレブス島ミンカンに転進のを以てが輸送 計画の作製及輸送の実施飛行機(特定の人員)陸上行軍(一部)海上輸送(大部) オニ方面軍司令部の転進に伴い兵站路部主力も同地区に転進し尔後十一月迄南部セレブス地区中部セレブス地区の輸送 及補給修理業務に任ず	又兵站並以下主力はオニ方面軍司令部内に在りて主として北都セレ ブスの揚陸、揚塔並に補給業務に任ず
〃 五十二年五月	ハルマヘラ島出張所を徴収全費復帰す	兵站路部解散す、将校以下全部はオニ方面司令部附に充用せらる。

才ニ軍電信才二十六聯隊略歴

聯隊長 加藤 孚  
 代理隊長 阿久根 悠(中佐)  
 又 " " 加藤 孚(少佐)

年月日	概要
昭和三〇	<p>ノ軍令陸甲才七号に依リ電信才二十六聯隊臨時編成滿成地「E口ツカ」群島「アンボニ」編成基幹(復帰部隊次)の如シ</p> <p>✓才十九軍通信隊本部</p> <p>✓独立有線才六十八中队</p> <p>✓独立無線才六十六小队</p> <p>〇 " 才六十七 "</p> <p>〇 " 才六十八 "</p> <p>〇 " 才七十八 "</p> <p>〇 " 才七十九 "</p> <p>〇 " 才八十 "</p>

年月日	昭 五 三 一〇
概 要	<p>         又連隊編成左の如し          連隊本部          有線中隊（オー・オ三中隊）          無線隊（十五小隊）          材料庫          了連隊配置の概要次の如し          アンボニ島          連隊本部オニ中隊          オ三中隊          無線隊（無線隊本部並に五ヶ小隊）          一、小ズンダ列島          一、チモール島       </p>

年月日	昭 五 三 〇
概要	<p>オ一中隊 無線隊（ニケ小隊） 「フロレス島」 無線隊（一ケ小隊） 「スンバ島」 無線隊（一ケ小隊） 「スンバワ」 無線隊（一ケ小隊） 「ヌニョーキニヤ島」 無線隊（ニケ小隊） 「カ」諸島 無線隊（一ケ小隊） 「タニバル」諸島 無線隊 「アール」諸島 無線隊（一ケ小隊）</p>

年月日	概 要
昭和三一〇	<p>4. 編成人員はオ十九軍通信隊本部並に独立有線一ヶ中隊独立無線七ヶ小隊、固定無線隊四ヶ小隊を以て充足す</p> <p>補充人員は南東軍ニニニ名支那派遣軍ニニニ名 其の他 名にして部隊にて掌握せし人員は南東軍一四名 其の他 名 計 名</p> <p>支那派遣軍よりの補充人員は到着せず</p> <p>5. 編成以来遼州北方地区に於ける作戦準備並に防行通信に任ず</p> <p>ムモルツカ群島セラム島に転進</p> <p>オ十九軍司令部のセラム島転進を伴ひアンボン島よりセラム島に移駐す</p> <p>遼州北方地区オ一号作戦 通信に任ず</p> <p>勢ホ二期二号作戦</p> <p>2. 昭和二十年三月十九日オ十九軍復帰同日オニ方面軍の戦斗序列に入りオニ軍司令官の指揮下に入らしめる</p> <p>同年六月二十一日オニ方面軍の復帰に伴ひオニ軍戦斗序列に編入せらる</p> <p>オニ軍司令部のセラム島転進に伴ひ連隊本部セラム島に移駐す</p>
昭和三九二	
昭和三六三	

年月日	昭 六 二 七
概 要	<p>連隊の転進に伴ひセラハ島に残置すべきもの無線隊の一部ヲ三中队の一部ヲ二中队材料隊の一部としカ一地区通信隊と味散す</p> <p>他は連隊本部と共に転進の予定アリシモ状況の急変に伴ひセラハ島に残置す</p> <p>此の由ニユーギニヤ島に配置しある無線一ヶ小队セラハ島に集結す以降</p> <p>人セラハ島に残置しある電信ヲ二十六册隊所属人員悉皆ヲ五師団に専属す</p> <p>又ニユーギニヤ島に配置しある無線一ヶ小队セラハ島マリンプンに集結す。</p>

独立有線九十八中队略正(前身電信オニ連隊オニ中队)

正代部隊長 陸軍大尉 北川 文治

年月日	概 要
昭 六 一 〇 三	転進の爲比律賓呂宋島マニラ港出発
〃 〃 一 三 〇	比律賓ミンダナオ島ダハオ港上陸
〃 五 二 三	独立有線九十八中队編成下々
〃 〃 三 三 四	編成完結
〃 〃 三 三 七	転進の爲ダバオ港出発
〃 〃 三 五 五	セレベス島(北部)セレベス ビートン港上陸
〃 〃 三 八 三	転進の爲セレベス島メナド港出発
〃 〃 三 九 六	セレベス島(南部)セレベス)パレパレ港上陸
〃 三 三 六 四	セレベス島出発
〃 〃 三 六 七	田辺上陸



独立有線オ一の〇中隊略正

正代部隊長 陸軍大尉 鈴木 達  
 一、部隊事情精通者

官城梟柴田郡槻木町大字碓辺町五八 曹長 大沼繁治  
 鹿児島県鹿児島市宇留町二軒茶屋二四八 准尉 田中正則

年月日	概要	要
昭和五三〇八	編成下令	編成地満州国林口於電信才四連隊
"五五	滿州国林口出發	
"五二五	釜山港出發	
"六八	比島マニラ上陸	
"七八	マニラ 出發	
"八三	「セレベス島」ナド上陸	「セレベス島」ナドに駐屯し通信網 構築並に 保甲に任ず 八月二十九日「セレベス島」ナド 西方約三〇〇軒海上に於て乗艦めきレ 丸連合軍潜水艦の突雷攻撃を受け沈没のため戦死一、生死不明

年月日		概	要		
昭	五	八	三	完全装備の有線器材全部を喪失したので上陸後諸部隊より若干の補充を受く	
"	三	〇	八	五	「ボツグム」宣言受諾の大詔を拜す
"	三	〇	五	日本軍集結地「ト」に移駐爾後同地に在りて現地自活並に終戦業務を処理す	
"	三	五	八	内地帰還のため「メナド」出發	
"	"	"	六	田辺兼三陸	
"	"	"	五	復員	

独立無線才八十六小队 勢才一三六五一部隊略正

部隊長 陸軍少尉 岩館新一

年月日	概	要
四月五	動員下令	
三月七	電信才四連隊補充隊に於て動員完結 縮込人員 長以下五十七名	
	榑太敷香陸軍病院より下士官長各一名	
	北方軍情報隊より兵技 一名	
	電信才四連隊補充隊より 十二名	
	臨時召集下士官兵 四十二名	
四月九	内訳 門司港出發	
五月七	マニラ港寄港	
五月三	セグ港寄港	
五月五	ハルマヘラ島ワシン到着	
八月九	同日より同島フエマキールにて警備 ワシン出發	

年月日	概 要
昭 五 八 二	セレバス島ピートン到着 ヲニ方面兵站路の指揮下に入る 独立混成隊五十七旅団長指揮下に入る 人ナト空襲にて七名戦死 終戦により作戦任務解除 ピートン地区に収容自若に入る 田畑荒上陸翌二十一日復員

独立無線オ八十七小隊略歴

オ二軍 部隊長名 陸軍中尉 志茂文男

年月日	概要
昭和三年三月七	昭和十九年軍令陸甲オ七号に依り編成次第
至白 〃 天 〃 〃 〃	本邦より駆進
至白 〃 天 〃 〃 〃	ハルマヘラ島上陸 輸送業務
至白 〃 天 〃 〃 〃	ハルマヘラ島 警備勤務
至白 〃 天 〃 〃 〃	セレベス島駆進
至白 〃 天 〃 〃 〃	セレベス島 輝オニ号休戦
至白 〃 天 〃 〃 〃	セレベス島 輝オニ号休戦
至白 〃 天 〃 〃 〃	セレベス島 輝オニ号休戦
至白 〃 天 〃 〃 〃	矢二オニ軍司令部に駆進
至白 〃 天 〃 〃 〃	勢オニ号休戦
至白 〃 天 〃 〃 〃	矢一オニ軍司令部に駆進

0501

独立無線九十二小隊略正

オニ軍 師隊長名 中村 細野 修

年月日	概要
昭和五三〇	軍令陸甲オ十二号により滿州国林口に於て編成完結
至自 〃 〃 八五	滿州より転進 比島マニラ上陸 輸送業務
至自 〃 〃 三、八	比島本口島 輸送業務
昭和 〃 〃 五 八	本口島に在りてオ一、撤病死
〃 〃 〃 三	セレブス島へ転進
至自 〃 〃 〇五 六三 〇三	セレブス島オ六、三号作戦に従軍
昭和 〃 〃 三 二	オ三、輝オ一部隊へ転出
〃 〃 〃 五 五	オ六、オ十六軍野戦自動車廠へ転出
〃 〃 〃 〃 〃	オ一、オ十六軍野戦兵器廠へ転出
至自 〃 〃 〃 〃	セレブス島勢オ三号作戦に従軍
昭和 〃 〃 〃 〃	下士官一、オ一、電信オ二十四連隊より転入

野戦電信オニ中隊略正

オニ軍正代部隊長名

- 1. 少佐 大竹元治
- 2. 大尉 佐竹三平
- 3. 中尉 大橋庸太郎
- 4. 大尉 正村菊雄

年月日	概	要
昭六三〇 元一六		南方駆進の為中支那漢口出發 ハルマヘラ島「ワシレ」上陸 尔後回島に在リて自線通信網構成並警備に従事 兵一名無線修業教育の為在「バオ」オニ方面冒通信隊に前進途中「バオ」 湾口に於て豊雄生(死不明)となる。(常盤丸)
昭六三 元一六		将校一名兵八名入院「ニラ」後送現在に至るも連絡なし 下士官一名、兵十五名中隊に退及の為「マニラ」出發「メナ」ドに向け前進 せるも尔後連絡なし
昭六三 元一六		オニ方面軍司令官の線下を脱し、オニ軍司令官の線下に入る。

ハルマハラ島上陸以来昭和二十一年四月三十日迄の戦死者	
戦病死	一〇名
不慮死	一名
準戦病死	一名



オニ軍司令部（スラバヤ連絡所）略正

独立混成オニ十八旅団小原敦部隊長

陸軍主計少佐

正代部隊長名

- 1. 少佐 北番 信男 水哇スラバヤ
- 2. 中佐 藤井 武考 " "
- 3. 少佐 小原 敦 天吾 " "

年月日	概要
昭一八二	<p>水哇島「スラバヤ」市にオニ十九軍司令部「スラバヤ」連絡所を開設し「スラバヤ」を通過するオニ十九軍隷下部隊の宿営給与並にオニ十九軍作戦地域に対する補給軍需品の集積保管前送に任ず</p> <p>オニ方面軍「スラバヤ」連絡所に編成改制し「スラバヤ」を通過するオニ方面軍隷下部隊の宿営給与並にオニ方面軍作戦地域に補給する軍需品の集積保管前送に任ず</p> <p>オニ軍司令部「スラバヤ」連絡所に編成改制し「スラバヤ」を通過するオニ方面軍隷下部隊の宿営給与並にオニ軍作戦地域に補給する軍需品の</p>

年月日	概 要
昭 示 ハ	<p>集積保管前途に任ず 終戦に伴ひ対重合軍集積軍需品引越準備及新移駐地たる伏見「スラカ ル」への集積</p>
" " 一〇	<p>伏見独立軍動勃発し部隊は相田せしめ田和二十一年五月六日島 「リ」才諸島「カラ」島に集積此の南伏見「スラ」カル「夕」先遣隊長大野原主計 大尉の率いる二回五名は「ガラ」ン島を経て六月十八日内遷オ二十五梯 団にて帰還す</p>
" " 二一	<p>オ二軍司令部討オ二軍「ス」ラ「バ」ヤ連絡所勤務員は全員独立現成オニ ハ家山小屋敷部隊に転属</p>
" " ハ	<p>小屋敷主計少佐以下三三四名朝嵐丸にて内遷ス竹港に入港 八月七日復員完結す</p>

-484-

0506

オニ軍南方軍オ四通信隊略正

正代部隊長名

部隊長名 加藤 亨 一

オニ方面軍通信隊司令官

陸軍少尉 永元元広

南方軍オ四通信隊長

陸軍中佐 佐藤辰夫

又 陸軍大尉 南雲龜吉

ニ 陸軍中佐 阿久根悠

々 陸軍少佐 加藤亨一

年月日	概 要
昭 六 二 五	オニ方面軍通信隊司令部の編成を滿州國齊々哈爾に於て完結
" " 三 二 二	齊州省々哈爾より転進
一 二 二	「シタナオ島」ダバオ」上陸
	オニ方面通信隊の編成を完結其の概指揮下部隊次の如し
	オニ方面軍通信隊司令部

0507

年月日	要
昭 五 一 一	<p>独立有線才九十八甲隊</p> <p>独立有線才九十九甲隊</p> <p>才二方面軍司令部通信班</p> <p>野戦通信才二中隊</p> <p>才七固定通信隊</p> <p>才八固定通信の一部</p> <p>電信才二十四連隊才五中隊</p> <p>独立無線才七十七小隊</p> <p>同 才八十八 "</p> <p>同 才八十九 "</p> <p>同 才九十 "</p> <p>同 才九十一 "</p> <p>南方軍通信隊司令部の一部(固定無線兼設班)</p> <p>才十九野戦郵便隊</p> <p>才一十九野戦の通信に任ず</p>

年月日	概要
昭和 元 二 七 上旬	<p>「セレベス島」メナド州が、スカセンに転進          オニ方面軍通信隊の編成に新に左記部隊を指揮下に入らしめらる          独立有線オ一〇〇中隊          輝オ一号作戦及輝オニ号作戦の通信に任ず          備成改正に依り南方軍オ四通信隊の編成を完結し南方軍通信隊の編          成に入る</p>
昭和 〇 八 下旬	<p>「トモホン」派遣隊の一部を「トモホン」残置し（依然トモホン派遣隊と          呼称）部隊本部並「トモホン」派遣隊の主力（中根無線隊と呼称）をオ          ニ方面軍司令部の転進に伴い南部「セレベス」シンカレに推進す</p>
昭和 元 二 七 下旬	<p>「マカツサル」航空通信派遣隊「マカツサル」に到着。輸送途東船被雷に          触れ重傷者二名を生ぜしむ生命に別状なし          ○「イドレ」派遣隊の行動概況次の如し          オニ軍司令部の転進に伴ひ先発将校以下十六名「マノクロリ」出発海路          「インドネ」を経て「イドレ」到着</p>

年月日	概	要
昭和 五 七 上旬	昭 五 三 七	〇 八 三 以降迄
〇 二 八 以降未迄	〇 六 以降	〇 七 〇
<p>主力將校以下二十九名陸路行軍により「マノクロ」出發せるも途中敵の銃爆雷糧食の欠乏皆無其の他悪条件の下將校以下体力損耗患者続發し兵員五に損耗し「イト」に半うじて到着せるもの僅に七名なり</p> <p>「アンボン」島「リアン」附近に於て「リアン」航空通信隊遺隊の通信所構築作業中敵空襲を受け銃爆雷に依り、將校一戦死</p> <p>逐次左記各隊の編成を解き本部位置に集結</p> <p>「リアン」航空通信隊派遣</p> <p>「マカツサル」派遣隊</p> <p>「ランゴア」航空通信隊遺隊の大部（一部をトモス派遣隊に配属）</p> <p>「マカツサル」航空通信隊</p> <p>「カニ」軍通信隊の編成（軍隊区分）に入り勢依成に伴う通信に任ず</p> <p>南部「セレベ」ス「カ」口「ニ」附近に於て通信器材輸送任務遂行中空襲を受け</p> <p>軍属ニ、戦死一、戦傷へ重傷入院（右スラバヤ向後送す）</p> <p>南部「セレベ」ス以外駐留各派遣隊を夫々現地部隊に転進</p>		

0510

ホニ方面軍野戦兵器廠部隊略正

正代部隊長名

- |    |      |       |
|----|------|-------|
| 一代 | 陸軍大佐 | 山賀死之助 |
| 二代 | "    | 田崎 繁龜 |
| 三代 | "    | 山賀死之助 |

年月日	概	要
昭 一 六 一 一 六	軍令陸甲ホ一三号に依り臨時編成下令、ホニ方面軍司令官の隷下に入らしめらる。	
" " 三 七	ホ一四軍司令官編成担任官となり渡兵参動ホニ四号に依り動員ホ一 日を昭和十九年一月二十五日とし二月十日動員完結日と定めらる。 面部隊及東部隊より差出の將校以下マニラに編成せらるべきも二月 十日迄に集合せる者はホ一四軍差出の主計見習士官以下十一名と東 部隊差出の先發せる將校二名のみなるを以て無期延期となる。	

0511

年月日	概要
昭 五 二 二	東部軍より差出要員將校以下一〇七〇名の一月十五日宇部宮に集結 官了せしむニ月上旬戦局の悪化に因リ「マニラ」到着の見込み立たず然 れども主計及び軍医將校各一名及西部軍差出の將校十一名が二月二 十四日に逐次「マニラ」に到着せしを以て人員裝備の大部を欠きたるも 三月十日を以て動員完結日と定めらる
〃 〃 二 三	主計並に軍医將校各一名及西部軍差出の將校十一名は「ハルマヘラ」島 「ワシレ」に到着
〃 〃 三 七	オニ軍差出の要員將校以下一〇三名「ハルマヘラ」島「ワシレ」に到着 台湾軍差出のオニ十三回特設勤勞団として九八八名「マニラ」に到着
〃 〃 六 三	「セレベス島」ビートンに出張所開設のため將校以下三十六名「ハルマヘ ラ」島「ワシレ」出帆
〃 〃 六 二	「セレベス島」「ニダ」に乾電池工場開設のため將校以下七名「ハルマヘラ」 島「ワシレ」出帆
〃 〃 六 六	ムナ支隊開設のため將校以下八十三名「ハルマヘラ」島「ワシレ」出帆
〃 〃 八 二	ムナ支隊増強のため將校以下四十五名「ハルマヘラ」島「ワシレ」出帆
〃 〃 八 八	ムナ支隊要員として「マニラ」より將校以下三十五名を前進す



年月日	昭 二 五
概 要	<p>才二軍野戦兵器廠要員將校以下一四八名当部隊に転属を命ぜらる。 同日を以て才二十七野戦兵器廠要員將校以下七十名転属を命ぜらる。</p> <p>輝才一 号 作戦</p> <p>輝才二</p> <p>輝才三</p> <p>勢才三</p> <p>終戦後復員見届迄下士官四名、兵一七名、台動一三名戦病死</p>

オニ方面軍野戦自動車廠部隊略正

正代部隊長名

入隊軍大佐 二宮邦彦  
 平野 秀

年月日	概	要
昭和一九三〇年三月三十一日	比島「マニラ」に於て軍令陸甲オ百十三号に拠る編成完備	
昭和一九三〇年三月三十一日	「バルマヘラ」に前進	
昭和一九三〇年三月三十一日	「バルマヘラ」島附近の基地設営補給修理業務、同地区の警備並に現地自活作戦に任ず	
昭和一九三〇年三月三十一日	の間に於て「セレベス」島「マカツサル」及「メナド」方面に支隊を開設、同地区の補給修理に任ず	
昭和一九三〇年三月三十一日	終戦業務処理並に内地帰還乗船準備に任ず	
昭和一九三〇年三月三十一日	「リバテ」型V号に乗船同日「バルマヘラ」島出發	
昭和一九三〇年三月三十一日	和歌山泉田田入港	
昭和一九三〇年三月三十一日	上陸 同日復員完結	

オニ方面軍野戦貨物廠 編カ一〇六三九部隊 略正

正代部隊長名

自	昭一九、三、一〇	陸軍主計少将	吉良五市
至	〃 七、二七		
自	〃 一九、七、二六	〃	〃 大佐 成瀬羽敏
至	〃 二、二、三三		
自	〃 三、二、二五		
至	〃 六、四	〃	〃 中佐 室村嗣雄

年月日	要
<p>昭 五 三 一〇</p>	<p>比島「マニラ」に於て編成完結 オニ方面軍司令官親下に入る編成完結時に於ける人員充足状況左の 如し</p> <p>本 廠 将校以下 五六九名</p> <p>南石勤務隊将校以下 三二二名</p> <p>編成完結に先立ち一部を「ハムマヘラ」に派遣本廠設定並業務開始の節 準備に任せらる</p> <p>本廠主力「ハムマヘラ」に到着</p>

年月日	概要
昭和 三 三	右と同時に既に「ハムラヘラ」に任りし20分30分支配隊入員を指揮下に入らしめらる
" 三 二四	「マニラ」より「ハルマヘラ」に向け航行中の輸送船「ベムカ」が「バオ」沖に於て敵潜水艦の雷魚を受け同便に便乗中の軍艦及台湾勤務団員中戦死三、生死不明者（軍艦二名、台湾勤務団員七名）を出せり（生死不明者は八月十日諸種の事情を結合勘察し死亡確認）
" 五 四	要員は逐次飛行機及便船を利用し「ハルマヘラ」に到着す 敵は一部は北都セラレス島に七月末日一部を西都セラレス氷道出張所を開設す
" 七 三	清況の變化に依り「ハルマヘラ」に帯出中特に軍野戦貨物取要員を指揮下に入らしめらる
" 八 五	オ三十二師団の指揮下に入らしめらる
" 八 一五	軍令陸甲オ一〇三号に拠り親下オ一南拓勤務隊は現地復師を命ぜられオニ方面軍司令部オ三十二師団オ十歩兵団司令部オ一野戦根拠地司令部樹立高射砲四十六甲隊に夫々隷属復師完結す

年月日	
昭和 二一 五	指揮下に入らしめら小あるオ一軍野戦貨物廠要員は当廠に転屈すること
" 四 三〇	南部セレベスに派遣しありたる准士官以下ハハ名はオニ方面軍司令部に北部セレベスに派遣しありたる准士官以下四七名独立混成オ五十七旅団司令部に転屈
" 〇 六 一	南部セレベス派遣の將校三〇名オニ方面軍司令部に転屈
" 〇 八 一〇	陸戦
" 〇 二 六 四	田辺上陸 復員完結

才二軍 才五野戦憲兵部隊略正

正代部隊長名

一 陸軍憲兵大佐 中村通則

二 " " 少佐 白敷 堯(代理)

年月日	概	要
昭 六 一 一 五	才五野戦憲兵部隊編成	
" " 一 三	完結	
" " 一 三	化野(野戦重砲兵才八連隊) 出發	
" " 二 一	本島着 宇高港出發	
" " 二 八	台湾(高雄)寄港 出航	
" " 三 七	昭南上陸 出發	
" " 三 三	スラバヤ上陸 同地に於て泷谷少佐以下若干名才四十八師団(チモ ール島)に素金大尉以下若干名才五師団(ニューギニヤ)に夫々配属 を被命任地に向け転進本部主力は三月五日スラバヤ出發同九日アンボ ン島に上陸す。	

年月日	要
自 五 六 九 三 九	濠北「アンボン」島に於て防行
自 六 六 五 前	濠北セラム島に於て防行
自 八 二 四	南部「セレベス」島に於て防行
自 三 六 八 三	敵下行動
<p>敵下各部隊は「セラム」島「ブル」島「チモール」島「ワエクル」島「ニューギニア」 「タタル」諸島「グ」諸島「ダニンバル」諸島「マンバウ」島「プロレス」島濠北各 島並「セレベス」島に設置し防行に在せり</p>	
<p>兵力損耗状況</p> <p>昭和十八年一月当敵編成完結以来昭和二十一年三月末に至る間 将校以下二十五名の死没者を出せり</p>	

オニ方面オハ野戦憲兵部隊略正

正代部隊長名

初代 陸軍憲兵中佐 阿部起吉  
 二代 " " 平野幸治

年月日	概	要
昭一八二五	滿總オ三〇六号臨時編成下令	
" " 一三	新京に於て編成完結関東軍司令官の親下に入る 編成定員 充足人員	
" " 一三	関東軍司令官の親下を賦しオニ方面軍司令官の親下に入る	
" 元 一 三	新京発同月十三日門司港出發	
" 二 二 九	臺北「ハルマヘラ」編成シレに上陸	
" 二 二 九	オニ中隊及オ田中隊(一小隊)を在「セラ」オ五野戦憲兵隊に臨時	
" 二 二 九	配属同月二十八日オニ中隊長古川大尉指揮「ワシ」發同地に前進	
" 二 二 九	オ三十二師団長の指揮に入る	
" 二 二 九	オ十野戦憲兵隊古川少佐以下一七七名を指揮下に入らしめらる	



		年月日	概	要
至自	〇五	八六	面三	勢三号作戦
至自	〇五	六三	〇一	〇三
至自	〇五	三五	一〇	輝三号作戦
至自	〇五	五二	〇九	向ハルマヘラ地区に於ける作戦警備
至自	〇五	八二	一〇九	向に於ける主要なる作戦警備勤務左の如し
〇〇	〇八	八一		<p>モロタウ作戦参加の際に「モロタウ」地区隊にオニ方面軍司令官より感謝状を授与せらる</p> <p>オニ野戦憲兵隊に臨時配属中の將校以下二三八名を同隊に転属せしめオニ野戦憲兵隊古川少佐以下一二五名を転入せしむ</p>
昭天	〇三	一一		

一 復員状況

ハ 昭和二十一年五月二十日 名古屋港に將校以下七五名上陸  
翌二十一日復員

又 昭和二十年十月間 に於ける 単独復員者 十三名

一 残留者の状況

戦争犯罪容疑者として連合軍の要求により「ハルマヘラ島」モロタウに  
残留人員左の如し

將校	一三名
准士官	一七名
下士官	一三二名
兵	二三名
その他	三〇
合計	一七八名

野戦機関砲才四十七中隊略正

部隊長 逆軍大尉 島居保年

年月日	概要
昭和六年三月二日	軍令陸甲カ号により野戦機関砲才四十七中隊の編成を命ぜられ
昭和六年三月六日	防空才四十二連隊に於て編成に着手
昭和六年三月九日	釜山港出帆 ハルマヘラ島に向ふ
昭和六年三月十三日	高雄港寄港(日推定)
昭和六年三月十六日	マニラ港入港上陸
昭和六年三月二十日	マニラ港出帆
昭和六年三月二十三日	セブ寄港(日推定)
昭和六年三月二十六日	ハルマヘラ島ワシレ着
昭和六年三月二十九日	海上輸送回警戒勤務(遭難該当なし)
昭和六年三月三十一日	ハルマヘラ島ワシレ地区の防空
昭和六年四月三日	同島ガレラに移駐後ガレラ飛行場並に船舶基地の防空

年月日		概 要	
昭 三 八 三	自 天 一 六	昭 三 八 三	<p>作戦任務を解除せる</p> <p>戦死なし、戦病死なし、戦傷下士官一、兵四（鎮壕裏に依り）</p> <p>同地に於て終戦処理業務並に現地自若</p> <p>同島ベテワンに移駐現地自若</p> <p>復員のためベテワン出帆</p> <p>復員完結</p>

特設第一機肉砲部隊略正（位置 ハルマヘラ島カウ）

勢才一六三一九部隊長

陸軍中尉 櫻 長造

年月日	概 要
昭 和 五 五 三	市川市野戦重砲隊才十八連隊補充隊に於て編成
" " 五 五 六	内司港出発
" " 五 六 八	マニラ上陸 同地にて兵站作業に従事
" " 五 七 七	マニラ出発
" " 五 七 八	セレベス島ビートン上陸
" " 五 八 七	セレベス島ビートン港出発
" " 五 八 二	ハルマヘラ島カウ上陸
" " 五 五 三	ハルマヘラ島カウ出発
" " 五 六 三	田辺港上陸
" " 五 六 四	復員完結召集解除

兵出身地 関東及東北、北陸  
 協成地 市川市

0525

特設才二機関砲隊略歴

部隊長名 陸軍中尉 河合 庄治

年月日	概要
昭和五三	陸面秘密才ニニ七号に依り機関砲隊編成を命ぜられ野戦重砲兵才十 八連隊補充隊に於て編成に着手
" " 五 五	野戦重砲兵才十八連隊補充隊に於て編成完結
" " 五 六	内司港出帆濠北方面に向ふ
" " 六 八	マニラ港着 上陸
至自 " " 七 六	マニラに於て次期作戦準備
昭 " " 七 六	マニラ港出發 ハルマヘラ島に向ふ
" " 七 三〇	セレベス島 ビートン港寄港
" " 八 二	ハルマヘラ島 ヘヤホール着上陸
" " 八 三	砲隊主力、ハルマヘラ島ハテクバコに前進し尔後同地に在りて防空 警備下士官以下十六名ブレレ島守備隊に派遣を命ぜらる。同地に前 進す尔後同地守備隊指揮下に防空警備
至自 " " 八 二八	マニラに於て戦病下士官一 兵二
昭 " " 八 二四	ピートンに於て戦病下士官二 兵一 作戦任務を解除さる

年月日	
概要	<p>至自 至自          〇元 〇元          八八 八八          二四 二四</p> <p>ブバレ島派遣隊 戦士兵四 戦病死共一（爆風により）          戦死兵一 戦傷兵一（爆風により） 戦病死共四          大バレ島派遣下士官以下十六名 任務終了し砲隊主力に復帰          作戦任務解除により尔後終戦処理業務並に現地自若          復員の為 ハルマヘラ出帆          復員完結</p>

オニ方面 軍特設オ三 機内砲部隊 略正

勢オ一六三二一 部隊長

陸軍中尉 内田陽康

年月日	概	要
昭五五三	野戦重砲兵オ五連隊補充隊に於て仮編成完結	
〃 〃 五六	内司港出帆「ハルマヘラ」向ふ	
〃 〃 六八	比島「マニラ」港寄港	
〃 〃 七〇	セレベス「ピートン」港寄港	
〃 〃 八一	「ハルマヘラ」島ウシレー湾内グルス上陸	
〃 〃 八二	進出のため主力グルソ出帆同島ハチタバコに着	
〃 〃 八五	尔後同地上空の警備、下司官以下二十一名「ワシレ」甲地区に分遣の 島主カと共に出帆甲地区着 尔後同地区上空の警備	
〃 〃 八三	オニ方面 軍特設オ三 機内砲隊の編成を命ぜられ「ハルマヘラ」島ハ チタバコ乙地区内に於て編成着手	
〃 〃 九四	同属ハチタバコ乙地区内に於て編成完結	
〃 〃 一〇四	依戦任務解除さる	



年月日	昭 三 五 三 〇 〇 〇
概要	甲地区分置下土官以下三十一名任務解除主カと合同 同地附近にて終戦業務並に現地自活 復員の爲同島「ハテクバコ」出帆 復員完結

- 507 -

0529

特設才田機関砲部隊略歴

正代部隊長名

- (1) 少尉 米山 嘉雄
- (2) 中尉 坂井 義明

年月日	概 要
昭 九 五 二 八	内司港出帆
" " " " " " " "	比島「マニラ」港上陸
" " " " " " " "	比島「マニラ」港出帆
" " " " " " " "	セレベス島「ピートン」上陸
自 九 八 五	セレベス島「ドモホン」地区に於て対空戦闘並に警備
自 九 二 九	南部セレベス「パレパレ」に転進
自 九 二 九	パレパレ附近に於て対空戦闘並に警備
自 九 二 九	疾病及対空戦闘に於て戦死（戦病死）者四名、入院者二名
自 九 二 九	入院者の現在地不明なり

0530

オニ軍特設オ五機南砲部隊略正

部隊長名 陸軍中尉 矢崎 豊

年月日	概 要
昭 一 九 五 三	陸軍留オ一七号により野戦重砲兵オ十八連隊 補充隊に於て仮編成 内司出帆
" " 五 六	マニラ上陸
" " 六 八	セレベス島ビートン上陸
" " 七 三	ランゴアン移駐飛行場防空
" " 八 九	編成完結(仮編成と同じ八十五名)オニ方面軍(海集団)の隷下に入る
" " 九 四	部隊主力(五十五名) ロンバンギン移駐防空
" " 一 〇 三	部隊主力アムラン移駐飛行場防空
" " 一 一 二	ランゴアン残留隊、トモホン移駐、都市防空
" " 一 一 三	部隊主力ランゴアン移駐飛行場防空
" " 一 一 四	オニ軍(海集団)の隷下に入る(オニ方面の解散により)
" " 一 一 五	南セレベス移駐の為出發
" " 一 一 八	ビートン集結終戦処理業務並に現地自活
" " 一 一 三	

年月日	至自昭 二五 一五 二二	概要
	戦死下士官一、兵一（爆風により）戦病死 下士官一、 特設才四機関砲隊より兵一、特設才六機関砲隊より下士官一 兵一 転属	
	兵十才百五十兵站病院に転属	
	復員の為 ビートン出発	
	メナド出帆	
	田辺入港	
	復員完結	

オニ軍特設オ六機関砲部隊略正

勢オ一六三二四部隊長

陸軍中尉 矢板木松

年月日	概要
昭 一 九 五	オ葉県市川野戦従砲兵オ十八連隊補充隊に於て仮編成 内司港出帆
" " "	マニラ上陸 同地警備並にマニラ南方軍兵器廠の業務に従事
" " "	兵一名マニラ陸軍病院に入院
" " "	勢参甲一五一号に依り昭和二十年八月十日最寄部隊に転属
" " "	セレベス島ビートン上陸
" " "	オニ方面軍司令官の隷下に入りオナド地区警備司令官の指揮下に入る
" " "	八月三日ランゴアン警備隊長の指揮下に入り八月九日ランゴアン警 備地到着ランゴアン飛行場警備並に防空任務に従事(渾オニ号作戦)
" " "	オニ方面軍特設オ六機関砲隊臨時編成完結
" " "	渾オニ号作戦ランゴアン附近の対空戦闘に於て兵四名戦死(裏面に依り)
" " "	
" " "	

年月日	概要
昭和二十一年八月二日	樹立混成中隊五十七旅団長の直轄二日一日ランゴアン出發 トモホシ着同地附近の警備並に防空任務に従事（輝オニ号作戦）
昭和二十一年八月二日	下士官一名輝オニ五〇兵站病院に於て戦病死
昭和二十一年八月三日	下士官一名輝オニ一五〇兵站病院に入院 勢参甲オニ一五一号に依り
昭和二十一年八月十日	昭和二十一年八月十日最寄部隊に転属
昭和二十一年八月五日	下士官一名モタヤオニ一五〇兵站病院分院に於て戦病死
昭和二十一年八月六日	兵一名トモキシオニ一五〇兵站病院に入院 勢参甲オニ一五一号に依り
昭和二十一年八月七日	昭和二十一年八月十日最寄部隊に転属
昭和二十一年八月七日	トモキン出發 西前部セラベスに向ひ前進
昭和二十一年八月七日	迄 北部セラベス警備
昭和二十一年八月七日	輝オニ三号作戦
昭和二十一年八月七日	勢オニ三号作戦
昭和二十一年八月七日	桂オニ一号作戦参加
昭和二十一年八月七日	終戦の詔書發布

年月日		概 要
昭 三 一 〇 三	マ カ ツ サ ル 州 パ ロ ホ 港 に 於 て 兵 一 名 公 傷 死	
" " 二 九	南 部 セ レ ベ ス マ リ ン プ ン 集 結 地 到 着	
" " 三 九	ピ ン ラ ン 州 テ ロ ア ン 郡 ス リ リ 陸 軍 病 院 に 於 て 兵 一 名 公 傷 死	
" " 五 五	迄 マ リ ン プ ン 及 び ス リ リ に 於 て 現 地 自 活	
" " 六 二	乗 船 当 月 出 帆 ( <small>港名忘失</small> )	
" " 六 四	田 辺 港 上 陸 即 日 復 員 完 結	

遊馬オニ中隊部隊略正

(「輝オ一七八ニ部隊

年月日	概	要
昭 一 一 一〇		遊馬オニ中隊の編成を命ぜられ、台湾軍歩兵オ一聯隊に於て編成完結 同日より出戦のモロタ島、新竹州湖口に於て待機
〃 〃 五 六		高雄港出港先「マニラ」に向ふ
〃 〃 六 二		「マニラ」港上陸一時待機
〃 〃 六 三		「マニラ」港出発「ハルマヘラ」島に向ふ
〃 〃 七 五		「ハルマヘラ」島ガレラ港上陸
〃 〃 七 二		オニ方面軍輝オニ遊馬隊編成規定により編成開始
〃 〃 七 一		右規定により「ガレラ」港に於て遊馬オニ中隊、遊馬オニ三中隊、遊馬オニ四 中隊を合併し、輝オニ遊馬隊の編成完結
〃 〃 七 一		遊馬オニ中隊長即ち輝オニ遊馬隊長となる
〃 〃 七 一		「モロタ」島警備の「ガレラ」港出発
〃 〃 七 一		同日「モロタ」島「ゴタラ」モ上陸
〃 〃 九 五		米軍上陸開始
〃 〃 九 五		「モロタ」島に於ける戦いに於て兵力約半減



年月日	概要
昭和八年二月	終戦
" " 九 二	「ハルマヘラ」島集結のため「ロタ」島「ドルバ」出発
" " " "	「ハルマヘラ」島「ガレ」上陸、同地附近にて終戦処理業務並に現地自活
" " 一〇 末	「ハルマヘラ」島「バテワン」に転進
" 三 五 九	復員のため「バテワン」出発
" " 三 三	名古屋上陸、復員完結

0537

遊 艇 六 中 隊 略 歴

年月日	概 況	摘 要
昭 五 一 二 五	遊艇六中隊要員として野敏重砲隊ハ聯隊に転属	
五 九	豫北米運の為、門司港出發	
五 一 八	台湾海峽通過	
五 三 〇	台湾高雄港寄港	
五 三 三	台湾高雄港出發	
五 三 七	アイリツピン群島マニラ港寄港	
五 三 八	同島マニラ港出發	
五 三 〇	アイリツピン群島日本港上陸行概	
		陸軍衛生軍曹、野口武夫 感冒のためマニラ陸軍病 院（南方ホ）に入院

年月日	概 要	商 要
昭 天 六 三	<p>里業休命中、中ニハ八号に依リ「マニラ」出港と同時にオ十九軍司令官の指揮下に入る。</p>	<p>陸軍一等兵 砂山惣太郎 肋膜炎のため「セブ」渡、オ一の六一四部隊に入隊</p>
六 三	<p>「フィリッピン群島「セブ」」港出発</p>	
七 五	<p>「ハルマヘラ」「ハヤホー」地上陸待機</p>	
七 五	<p>「ハルマヘラ」「ハヤホー」地出発</p>	
八 一	<p>「アンボン」港上陸</p>	

年月日	概要	摘要
昭 五 八 一	昭和十八年、軍令陸甲才百十九号、並陸機密、才五〇八号に依り、遊島、才六中隊編成着手	陸軍兵長 渡部広次 アマハイに於て戦犯 陸軍兵長 本山富雄 マカリギに於て戦病死
八 二	編成完結	
八 六	堅禁作命中、才三百三十二号に依り、遊島網構成着手、並、爪後の作戦準備	
八 六	「アンボ」港出発	
九 二〇	「セラム島」「アマハイ」地上陸尔後遊島網構成	
一〇 一六		

0540

年月日	概	摘要
昭和五〇年八月八日	<p>望船作命甲ヲ十四号に依リ、才五師団一部 部隊の駆進援助並、濃珠輸送の指命に従事 輝才ニ号作戰に従事</p>	<p>陸軍上等兵三浦元重 ペラの戦斗に於て戦死 陸軍伍長高橋武 ヘラの戦斗に於て戦死</p>
昭和五〇年八月三日	<p>才二軍団司令官の指揮下に入る</p>	<p>陸軍兵長中道ハ三イラ に於て戦死</p>
昭和五〇年八月五日	<p>才五師団長の指揮下に入る</p>	
昭和五〇年八月八日	<p>和平詔勅発令</p>	

ル  
ル  
ル

年月日	至 自 〇 八 ハ 〇 二 四
概 要	<p>「セラム島に於て濠北地区防犯作戦参加 命ぜらる 艦命甲オニ九号に依り「ホハマル半島」移駐を 命ぜらる 移駐のため「セラム島」「マカリ」に出発開始 「ホアマール半島」「ル」地上陸移駐完了</p>
摘 要	<p>陸軍主計准尉 小泉勝司 「マカリ」に於て戦死</p>

遊撃舟八中隊略証

(艦舟五七六二部隊)

年月日	概要
昭和五年四月三	軍令陸甲オ三八号により遊撃舟八中隊の編成を命ぜられ戦車オ十九
四	聯隊補充隊(中部四十九)に於て編成に着手
五	戦車オ十九 聯隊補充隊にて編成完結
六	竹司港出帆
七	高雄寄港
八	マニラ寄港
九	ハルマヘラ島ワシレヘメシヤ又シヤ) 寄港
十	自五月十四日 南 上陸作業に従事
十一	至六月十四日 南 上陸作業に従事
十二	アンボイナ島アンボン港寄港
十三	セラム寄港
十四	リ、ン、ラサハタに前進し、尔后同地附近の警備
十五	將校以下三十六名ワハイに前進
十六	將校以下十五名北岸ウエに前進

年月日	概	要
昭 三 四 五	將校以下通信隊分隊九名ウエンパンテに前進 作戦任務を解除さる	
昭 三 五 八	向戦死 二名 (准士官一名 下士官一名) 戦病死 八名 (下士官一名 下士官一名)	
昭 三 五 三	ホアマル半島ハトワランに転進同地附近に於て終戦処理事務並に 現地自活	
昭 三 五 五	アサウデに転進	
昭 三 五 三	務員のため、アサウデ出陣	
昭 三 五 五	和歌山県田辺港着復員完結	

0544



オニ方面軍南方オ十五陸軍病院部隊略正

(空オ六〇八五部隊)

正代部隊長名

陸軍軍医中佐

清水 伸  
大佐 波川定男

年月日	概	要
昭一六 一 一四	軍令陸甲オ一号により南方オ十五陸軍病院の編成を命ぜられ大阪陸軍病院に於て編成に着手	
〃 〃 一 一六	大阪陸軍病院に於て編成完結	
〃 〃 一 一〇	宇島港出老南方に向ふ	
〃 〃 一 二二	誤松港に寄港	
〃 〃 一 二七	(日推) 高尾寄港	
〃 〃 二 七	(〃) シンガポール寄港	
〃 〃 二 二五	(〃) スラバヤ寄港	
〃 〃 三 五	アンボイナ島アンボンに上陸	
〃 〃 三 五	同所に於てオ十九軍司令官の隷下に入り病院開設	

年月日	概要
昭 六 一 〇	(日越) 同島ハリ耐丘に移駐病院開設
" 九 〇 九	(") 部隊主力はセラム島ビル東地方に一部は同島ホニケト耐丘に移駐病院開設
" 五 六 五	在ニューギニアオオ九兵站病院のオニ半部隊以下約八十五名を転属せしめらる
" 一 〇	へ註 本転属は名義のみにて実際に入員を掌握せしことなし 連合軍の命によりセラム島在各部隊同島西方半島に集結せしめられ (地名と失) 病院開設の傍終戦業務並現地自活
" 三 四	オオ九兵站病院より転属の人員は騎兵オ五連隊に転出
" 大 五	復員の為 同地出帆
" 大 三	復員完結(田辺)

0546